

基調提案 3

—実践例に基づいて

ゲルハルト・リヒターを通じて抽象絵画教育を考える

湯川雅紀

YUKAWA, Masaki

画家・和歌山県立田辺高等学校、海南高等学校非常勤講師

■プロフィール

1966年和歌山生。大阪教育大学大学院（修）美術教育専攻絵画・彫塑専修修了。その後ドイツに渡り、デュッセルドルフ芸術大学にてマイスターシューラー取得。2010年に制作拠点を日本に移し、作家活動を続ける傍ら、和歌山県立田辺高等学校、海南高等学校等に非常勤講師として勤務。

■専門領域・研究主題

絵画：制作のテーマは、層構造の絵画空間がもつ表現の可能性を探究することである。これは日本の絵画が伝統的に持っていた空間表現を、現代絵画の中で再生するという試みでもある。

■主な著作・作品など

「美術館と小・中・高・大の連携によるポップアート題材群の発と実践」（共著）『教育実践総合センター紀要』No.22, 2012（和歌山大学）

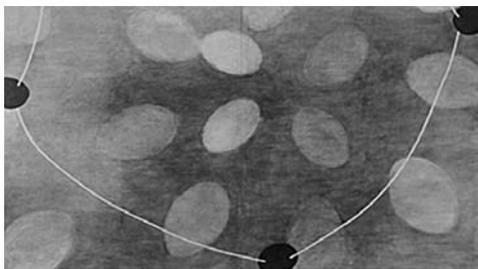
「ドイツにおける芸術家をとりまく環境」（単著）『いまいるところ／いまあるわたし』展カタログ（宇都宮美術館, 2006）

受賞：第5回VOCA展（上野の森美術館, 1998, VOCA賞）

個展：第一生命ギャラリー（東京, 2000, 04, 10）、コバヤシ画廊（東京, 2010, 11, 12）他多数

企画展：「いまいるところ／いまあるわたし」（宇都宮美術館, 2006）、「賛美小舎上田コレクション展—それでも人は、『境界』を越える。」（練馬区立美術館, 2007）、「かたちと色のABC」（和歌山県立近代美術館, 2012）他多数

収蔵：東京国立近代美術館、東京都現代美術館、練馬区立美術館、横浜美術館、和歌山県立近代美術館等



湯川雅紀 無題 1997 (VOCA賞受賞作)

■社会的活動

美術科教育学会会員（2010-）

和歌山大学美術教育研究会会員（2010-）

和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター特別研究員（2012-）

■E-mail : mayutohi37@yahoo.co.jp

1. 抽象絵画教育の可能性について

本稿で試みるのは、ゲルハルト・リヒターの作品を使用した抽象絵画の題材開発とその実践の検証である。

リヒターの描く抽象絵画に顕れる、無作為の行為から生まれたテクスチュアやマチエールが、視覚以外の感覚でとらえた世界を可視化するための手段となることを、制作を通じて体験的に理解させることに留意しながら題材開発および実践を行い、それが現代の絵画教育カリキュラムの作成にいかなる意味をもち得るか、特に抽象絵画の教育のために重要な要素を孕んでいるか、という点に関して考察したい。

ゲルハルト・リヒターといえばフォト・ペインティングやカラーチャートからアブストラクト・ペインティングまで、多岐にわたる制作スタイルで知られるが、一貫性がないように見える彼の作品群に共通する意思是「表面」を造形することであると考えられる。写真にせよカラーチャートにせよ、彼の描くものは表面として存在するものであり、アブストラクト・ペインティングでは、絵具が乗った支持体表面の操作が主要な問題となっている。これは絵画の平面性、物質性を重視する制作態度であり、かつ描く対象に制作者の主体的意思を感じさせないことから、戦後モダニズム絵画の影響を大きく受けているといつてよい。

しかしリヒターの制作における大きな特徴は、モダニズム絵画の理論を客観的、網羅的に実践している点にある。彼の絵画は写真と絵画の関係を踏まえた上で、抽象絵画の発生からミニマル・アートにいたる近代絵画の還元主義的な変遷について、批評的視点から冷静に分析し、客観的な態度でそれらを再構築しているかのような印象を受ける。しかも様々な様式を横断的に扱い、技法や制作スタイルのルーティンに陥ることがない点は過去の戦後モダニズム絵画に例がない。

一般的に、抽象絵画はモダニズムの終焉とともに衰退したかのように思われがちだが、リヒターのように21世紀に突入した現在もなお精力的に抽象絵画を描き続け、それが豊かな表現として、世界的にも高い評価を受けている作家が存在していることも事実である。どうしてなのだろうか。それは彼が抽象絵画の可能性を信じ、今なお絵画で人を感動させることができると、信じているからに他ならない。このことは彼の発言にも明確に表れている。

「我々は抽象絵画によって、決して見られないもの、理解されないものに近づく最良の方法を創りだした。それは絵画がもっとも直接に感覚的なものをもたらすからだ。」¹⁾

モダニズム絵画を引用しながら、モダニズム絵画が陥った理論主導の袋小路を回避しつつ、絵画表現の豊かさを取り戻そうというのがリヒターの絵画であり、これ

は現代における絵画教育の再生を考える上でも、非常に示唆に富むものではないだろうか。

美術教育の中で抽象絵画は、バウハウスを始まりとする構成教育とデザイン教育として、またキュビズムからモンドリアンにいたる、自然のエッセンスを抽出する絵画教育として取り扱われてきた。これらは戦前の抽象絵画を、形態と色彩の関係に重点を置いてカリキュラム化したものである。

これに対しアメリカを中心とした戦後の抽象絵画は、表現様式が多様化し、身体性や行為等を強調したり、絵画の物理的構造を主題としたりするなど、絵画を批判的に捉える意識が強くなったため、絵画教育の題材として扱うには開発と実践に困難を伴うものが多い。すなわち抽象絵画には、戦前と戦後を通じて系統化されたカリキュラムが存在しないのである。

このような状況下で、リヒターを題材とした抽象絵画教育の試みは、戦後のモダニズム絵画を中心とした抽象絵画の系統化されたカリキュラム作成に有効なのではないかと考えた。彼の作品はモダニズム絵画を俯瞰的にモチーフとして扱いながら、その根底に絵画表現の可能性を愚直なまでに信じる態度が見られるため、そこを起点として、純粋な絵画教育として抽象絵画における表現を体験させることができる上、形態と色彩の他に、表面のテクスチュアやマチエールによる表現の可能性を学ぶことができるからである。

またこのような偶発的なテクスチュアによる表面を作り、その魅力を理解することは、絵画のみにとどまらず、デザインや工芸など、子どもの美術体験に広く影響を与えると考えられるので、美術教育の根源的な役割にも通じる、重要な要素ではないかと考えている。

2. 題材開発

■題材名 : 見えないものを描こう

■対象学年 : 和歌山県立海南高等学校大成校舎 第1学年

■題材について

前出のゲルハルト・リヒターの言葉に倣い、見えないものを表現する抽象絵画というテーマを設定し、いろいろな「見えないもの」を考えながら、それを可視化させる練習を経て、リヒターの抽象絵画を鑑賞し、彼の表現意図を考えながらリヒターの絵画を追体験させる。

リヒターの抽象絵画は、スキージで一気に引き延ばされた絵具が見せる様々な偶発的なテクスチュアが特徴的である。それらが何層にも重ねられ、表情豊かな表面と空間が形成されている。そこに込められた造形意思を想像しながら、彼と同じ方法を用いて抽象絵画を制作することにより、偶発的な色彩の混ざり合いやテクスチュアで何かを表現できることに気付かせたい。

制作にはB3サイズのキャンヴァスボードとアクリル

絵具、それに幅25センチ程度の窓拭き用ワイパーを使用した。

■学習目標

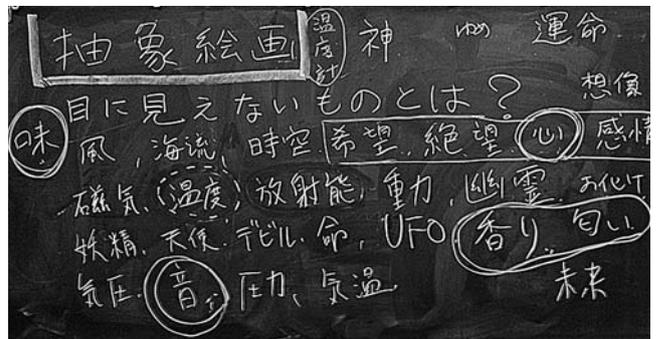
- (1)抽象絵画に関心をもち、積極的な態度で見えないものを探究し、表現のテーマを設定する。[関心・意欲・態度]
- (2)見えないものを可視化するにあたって、色や形を工夫して表現する。[発想・構想]
- (3)道具や絵具の特性を生かして、様々な表現方法を駆使して作品を制作する。[創造的技能]
- (4)リヒターの抽象作品に込められた表現意図について考え、自分の言葉で表現する。[鑑賞]

■指導計画

【第1次】「見えないもの」について考え、表現する練習

【第2次】リヒターの鑑賞

【第3次】制作：リヒターの抽象絵画を追体験

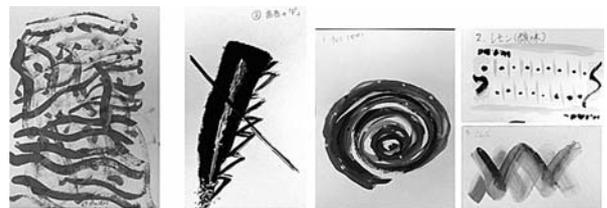


■指導のポイント・学習のフォーカス

【第1次】

ワークシートに「見えないもの」とは何か、考えて書き出し、発表させる。生徒の想像力が膨らむように、発表されたものはもれなく板書する。

その後、皆が考えたいろいろな「見えないもの」の中から、「感覚」を取り上げ、聴覚、嗅覚、味覚などを目に見えるように表現する練習を行う。



音1 (波)	音2 (鉄琴)	味1 (チョコ)	味2 (レモン)
匂い1 (石鹸)	匂い2 (糖漬け)	味3 (昆布)	
いろいろな感覚を描く練習			

【第2次】

リヒターの作品(フォト・ペインティングと、アブストラクト・ペインティング)を紹介し、制作方法や考え方を説明しながら鑑賞。

次に、リヒターのフォト・ペインティングと、アブストラクト・ペインティングを比較し、高度な写真模写の技術をもつ彼が、どのようにして絵具を伸ばしただけの抽象絵画を制作するようになったのか、を考えさせる。フォトショップの画像加工により、写真に水平方向のブレを加えることで、リヒターの抽象絵画のような画面を作り出せることを体験し、写真と抽象の間を行き交うリヒターの制作スタイルについて、理解を深めさせる。

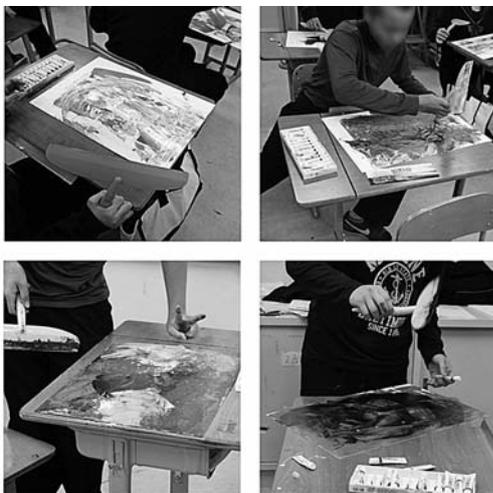
最後に、リヒターの言葉（「我々は抽象絵画によって、決して見られないもの、理解されないものに近づく最良の方法を創りだした。」）を紹介し、彼が抽象絵画を制作して表現しようとしたものとは何だったのか、考えさせ、ワークシートに記入させる。その際、第1次の最初に行った活動で「見えないもの」について考えたことを思い出し、参考にさせる。



生徒作品 フォトショップで写真を加工しながらリヒターの制作に迫る

【第3次】

リヒターが表現したかったことを念頭に置き、各自それを実現できるように、リヒターと同じ手法を使って作品制作を行う。窓拭きワイパーを使って絵具を伸ばす作業は、周囲への汚れを気にして動きが小さくならないよう、机にはみ出すことを気にせず、キャンヴァスボードのサイズぎりぎりまでワイパーを動かすよう指示する。自分のつくった作品の意味を明確に意識させるため、最後に自分のつくった作品にタイトルを付けて完成とする。



授業の様子（制作風景）

■生徒作品

絵具を、チューブからキャンヴァスに直接絞り出す行為はもちろん、窓拭き用ワイパーを使ってそれを伸ばしながら絵を描くという行為も、生徒たちにとって初めての体験である。最初の反応は面白がったり、戸惑ったり、怖がったりと各人様々であったが、慣れるにつれて、各自が思い思いの工夫を凝らしながら作品制作に取り組んでいった。



生徒作品 a



生徒作品 b

作品 a と b は、リヒターの重層化された絵具の痕跡が作り出す空間性を、忠実に再現することに成功している。絵具を何層も塗り重ねていると、各色が混ざりすぎ、鈍重で平板な画面になってしまうのだが、両者はその寸前を見切って、重厚な絵具の重なり合いや混ざり合いと鮮やかな色彩の対比が空間の深さを感じさせる作品を創りだしている。



生徒作品 c



生徒作品 d

作品 c と d も、リヒターの画面を丁寧に観察した成果が表れている作品である。ワイパーの動きを生かした、スピード感とリズム感にあふれる表現が特徴的で、ワイパーで絵具を伸ばす行為を上手くコントロールしながら、魅力ある表面を創りあげている。



生徒作品 e



生徒作品 f



生徒作品 g

作品 e、f、g は、リヒターの絵画を再現する、というテーマを超えて、ワイパーを使った独自の表現に踏み込んでいる例である。

e は色彩の組み合わせに独自の工夫が見られ、f は一旦塗った絵具を削り取りながら、明暗のコントラストを生かした空間を創りだし、そして g においては、薄く引き伸ばされた絵具の重なり合いが透明感を湛えた空間を表現している。3作品ともリヒターから離れて、自分の表現したいものを描こうという意思が感じられ、それが作品の魅力となっている。

3. 実践を終えて

以上のように、生徒作品の中に多様な表現が現れたことは、抽象絵画を「見えないものを描く」手段であると捉え、この点について、導入時から入念に意識付けてきたことも背景にあると思われる。特に、生徒作品 e、f、g のようにリヒターの手法を使いつつ、自分なりの表現を試みる生徒が出現したのは、リヒターが表現したかった「見えないもの」について、生徒それぞれが思考を重ねた結果であると考えられる。

さらに生徒作品 e、f、g をみると、リヒターの抽象

絵画の手法は、子どもたちの表現に対する意欲をかき立てる要素を孕んでいるように感じられる。リヒターを離れて表現されたこれらの作品群は、かつての抽象表現主義や、アンフォルメル等の作品をも彷彿とさせる。これはリヒターの手法が、戦後モダニズム絵画の多様なスタイルを超えた、絵画にとって根源的なもの、を顕在化させる契機となりうることを示すものである。

このことから、リヒターの抽象絵画の手法を学ぶことは、戦後モダニズム絵画の歴史を体験的に理解し、さらに抽象絵画による表現の豊かさを学ぶことにつながる、ということがいえるだろう。

表面のテクスチュアについては、偶発性による様々な表現の可能性に子どもたちが気付いて、様々な試みを行ったことが成果として挙げられると同時に、リヒターの画面が表面にとどまらず、絵画的な深さを志向するものであることも今回の実践で明らかになった。ワイパーで押し潰され、引き伸ばされた絵具による表面は、マチエールを形成しない、ツルツルの表面であり、絵具は画面の内部に塗り込められ、深さを伴うテクスチュアとして定着されるからである。ここでもリヒターの手法が絵画空間の深さを形成させやすく、表現の幅広さを志向するものであることが、生徒たちの表現の多様さを生み出したといえるだろう。

なお、リヒターの作品に潜む「表現への意思」を通じて、子どもたちが抽象絵画についての理解を深め、表現の多様さを学ぶ、という体験が、現代の美術教育の中でどのような意味を持ち、いかなる役割を果たすことができるか、という点に関しても、この実践を今後どのような題材と組み合わせ、繋げてゆくのか、という点も含めたこれからの取り組みの中で明らかにしてゆきたいと考えている。

註

1) 「ポンピドー・コレクション展カタログ」

編集：発行：東京都現代美術館、朝日新聞社、テレビ朝日 1997 p156

参考文献

- ・ゲルハルト・リヒター『写真論／絵画論』、企画／ワコウ・ワークス・オブ・アート、翻訳／清水穰、淡交社、1996
- ・Gerhard Richter, „Übersicht“, Institut für Auslandsbeziehungen, Verlag der Buchhandlung Walter König, Köln, 2000
- ・Gerhart Richter „Gerhard Richter. Bd.1: Katalog der Ausstellung, Bd.2: Texte, Bd.3: Werkübersicht 1962-1993: 3 Bde“, Bonn Kunst- und Ausstellungshalle d.B., 1997